

# 第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「死ぬほど」を探して

三重県  
神農 あかり

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「死ぬほど」を探して

神農 あかり

「昨日死ぬほど雨降ったから、今日はお花にお水あげなくていいね。」

大雨が降った次の日の朝、これでもかというほど晴れている庭を眺め、母はそう呟いた。

「そうだねー。昨日ほんとに雨すごかったもんね。」

何気ない母の言葉に返事をしてしていると、私の中でふと一つの疑問が芽生えた。

『「死ぬほど」ってなんだ。』

「程度が甚だしい」という意味の強調表現であることは分かっているのだが、よくよく考えてみれば何故「死ぬ」という言葉を使うのだろう。辞典を引いても項目がない。そうだが、「死ぬ」の反対の「生まれる」を使って、「生まれるほど」なんていう表現だってありうるのではないか。しかし「生まれるほど」では何かしっくりこない。思い返せば、私も家族や友人との会話で使うし、テレビやSNSでも頻繁に見かける。こんなにもこの言葉が使われるのは、私たちが無意識のうちに「死」に対して持つ共通した考えがあるからなのではないか。

こうして「死ぬほど」についてもんもんと考えていくうちに、この言葉が気になって仕方がなくなってしまう。

こうして、私の「死ぬほど」の正体を探す旅が始まったのだった。

まずは日常の会話にもっと注意深く耳を傾けてみた。すると「死ぬほど」が私の思ったよりもはるかに多くの場面で使われていることが分かった。集めてみた例はどれも私にとって興味深いものだった。

「死ぬほどつらい。」

「死ぬほど痛い。」

「死ぬほど寒い。」

「死ぬほど恥ずかしい。」

「死ぬほど面白い。」

「死ぬほど好き。」

「死ぬほどかわいい。」

「死ぬほどださい。」

「死ぬほど笑う。」

「死ぬほど食べる。」

「死ぬほど頑張る。」

なるほど、「死ぬほど」がここまで日常的に使われている言葉だとは。

この他にもたくさん例を見つけたのだが、中でも一番インパクトがあったのは、

「死ぬほど健康。」

というフレーズだった。

「死ぬのか健康なのかどっちなんだ。」と思わせるようなこの言葉遊びのようなフレーズに、私は思わず「ふふっ」と笑った。

ああ、言葉について考えることってなんて面白いのだろう。言葉ってなんて不思議なのだろう。

たくさん例を集めたことで、「死ぬほど」という言葉へのわくわくした探究心が強まったのだが、同時に「死ぬほど」の正体がいつそう分からなくなり、煙に巻かれた気がしてもやもやした。そこで私は、何故私たちは「死ぬほど」をこんなにも使うのだろうという疑問を色んな人に投げかけてみた。

ある人は、

『死ぬほど』って『すごく』よりも、もっと強調したいときに使うよね。」  
という答えをくれた。

またある人は、

『死ぬほど』ってすごく発音しやすいから、みんな使うんじゃないかな。」  
という答えをくれた。

またまたある人は、

『死ぬほど』について何をそんなに考えることがあるの？ 分からないや。」  
という答えをくれた。

私もこれほど考えているのに何も分からなかった。自分を含めた多くの人が、どうして「死ぬほど」という言葉を違和感なく受け入れているのが分からなかった。そして何よりもどうして自分がこんなにも「死ぬほど」に執着しているのかも分からなかった。考えていくうちに、私は結局答えのない、意味がないことをひたすら考えているだけなのかもしれないと思い始めた。もういつそ考えることをやめてしまおうか。

少し気落ちした私は、私よりもずっと年配の女性に同じ質問をしてみた。すると彼女は単純明快な一言で私にこんな答えをくれた。

『死ぬ』ということが、人間にとって『究極』だからじゃない。」

この一言を聞いて、私はようやく「死ぬほど」の正体を探す旅の終着点が見えた。そうか、死ぬことは人間にとって「究極」であることを私たちは心の奥底で分かっているから、「死ぬほど」を使うのか。

「人生は自分が自由に使っている時間のことを言うんだよ。」と昔、誰かに教えてもらったことがある。この言葉を聞いたとき、私はとても感銘を受けたのだが、時が流れ、日々の忙

しきからこの「自分が自由に使っている時間」には限りがあるということ忘れてしまっていた。いや、忘れてしまうことが多いの人にとっても当たり前になつていないのか。私たちは毎日訪れる「今日」を迎え、「今日」起きる出来事に体と心を動かして生きている。毎日が「今日」の積み重ねだからこそ、当たり前前の毎日をいつも通りに生き、自分の人生の終わりを考えない。

しかし、普段は忘れてしまつていても、心の奥底では強く、しっかりと分かっているのではないだろうか。「一度しかないこの人生が終わるとき」がこれ以上ないこと、つまり「究極」であることを。

だからこそ、私たちは「死ぬほど」をこんなにも多くの場面で使うのではないだろうか。

ひよんなことから始まった「死ぬほど」の正体を探す旅は、結局、「程度が甚だしい」よりもっと強い「これ以上ないほどの」という意味の強調表現である、という結論に至った。しかし、まさか「死ぬほど」について考えて、自分の人生が終わるまでの時間の大切さを考えさせられるとは思わなかった。

そして、「死」が「究極」であることを心の奥底で分かっているからこそ「死ぬほど」を使う、という私の確信が、「あなたの人生はあなたが普段気付いていなくてもとても価値があるものですよ。」とそつと寄り添ってくれている気がした。